

# 病院は私たちの宝 市民の方で復活した地方病院。

硬直した公立病院経営のあり方に風穴を開けた  
兵庫県の市立西脇病院のケース。



新たにオープンした西脇病院

## 栗野仁雄

みわの・まお (ジャーナリスト)

1956年兵庫県生まれ。大阪大学文学部卒業。ミノルタカメラ、共同通信を経てフリー。著書に「警察の犯罪」「この人、痴漢！」と言われたら」など。神戸市在住。

子供が入院する  
ところがない

兵庫県中部、加古川かこがわのほとりに位置する人口四万五〇〇〇人ほどの西脇市せきわき。六〇年の歴史をもつ市立西脇病院は建物が老朽化し昨年十一月、真新しい施設がオープンした。三三〇床、一八診療科と充実。「前は暗くてお化け屋敷みたいでした。本当に明るくきれいになりましたよ」と待合ロビーの女性。明るいレストラレストランや音楽会などができるコーナーもある北播州地方の中核病院は、怪我や病気でなくても子供なら遊びに来

てしまうのではないかと思うほどの  
雰囲気だ。

「西脇小児医療を守る会」の石井眞  
理子さんが危機的状况を知ったの  
は、三年前の十一月頃。「五歳と二  
歳の子供を抱えるお母さんから、西  
脇で子供が入院できるところがない  
と聞きました。当時、私の子供は上  
が三年生、下の双子が一年生でし  
た。双子の一人がちよつと弱くて  
時々病院に行つてましたが、最初  
はぴんとこなかつたんです」

聞いてみると最盛期は医師が五〇  
人以上いた西脇病院はその頃、一  
人、二人と櫛の歯が抜けるように去  
り、三七人にまで減っていた。「な  
かでもピンチだったのが小児科でし  
た。医師が一人になつてしまい入院  
できなくなつた。許永龍先生が一人  
で奮戦していました。来住（壽一）  
市長さんはじめ、市も必死に医師を  
探していました。入院が必要な子供

さんは、加東市を挟んだ小野市民病  
院まで行かなくてはならない。働く  
お母さんも多く大変でした」。

小児科と連動する産科もピンチだ  
つた。ここで子供を産んで育てられ  
なくなるということを知り、石井さ  
んは初めて危機感をもつた。「この  
ままでは病院が危ない。危機的な現  
実を市民に訴えなくては大変なこと  
になる」と仲間を募り、「西脇病院  
小児科を守る会」を立ち上げた。調  
べるうち、同じ兵庫県丹波市の県立  
柏原病院なども経営が危機的なこと  
がわかつた。仲間は四一人も集まっ  
た。幼稚園児などを抱えていた村井  
さおりさんが代表、石井さんが事務  
局を務め、署名チームなどに分かれ  
て活動を始めた。

は六万五〇〇〇も集まつた。「小児  
科を守る会」は、「医療を守る会」  
と改名した。

「仲間が増えると、手の空いたお母  
さんが活動中のお母さんの子供さん  
をちよつと見てあげたりできまし  
た。活動の直接目的は入院再開と医  
師の増員です。わかりやすかつたの  
もよかつたと思います」と石井さん  
は振り返る。

会では、地元の医師に病院の現状  
などを教えてもらった。夜中など、  
勝手気ままな時間に病院に來られて  
も医師たちは疲弊している。いわゆ  
る「コンビニ受診」をやめないと、  
医者が去つてしまうことも知つた。

と言われても、子供に異変があれ  
ば若い母親は不安だ。「昔なら自分  
たちの母親が教えてくれたことも、  
核家族化でわからない。大した症状  
ではなくても、初めて子供を持った  
若いお母さんは、心配でなんでもか

んでも病院に走ってしまふ。親が子供の症状を、ある程度判断できるよ  
うにすることが大事です」と石井さ  
ん。

## 住民の理解を求め 奔走した医師たち

医師会の人たちには「どの程度な  
ら医者に行かなくてはならないか」  
「子供が食べ物や吐いたらすぐ行っ  
ていいんですか」など、率直な質問  
に丁寧(ていねい)に答えてもらった。

「それまでお医者さんは別世界の雲  
の上の人のようだったのが、身近に  
なってきました」と石井さん。「守  
る会」では冊子も作った。リングで  
留めた小冊子『休日・夜間の小児救  
急について』には、「小児救急医療  
の電話相談先」や、気になる症状を  
例示して対応を教えてくださいネット  
案内、緊急で救急車を呼ぶときや病  
院へ行くときの携行品(けいこうひん)などが書かれ

ていて非常に便利なものだ。  
地域の公立病院について、周辺の  
開業医(かいぎょうい)は無関心なことが多い。

しかし西脇市は違った。市の周囲  
も含めた「西脇・多可郡医師会」の  
メンバーが立ち上がった。中心に  
なったのは「クリニック和田」の和  
田良勝(よしとし)院長、「富原循環器内科」の  
富原均(ひとし)院長、それと「藤田小児科  
医院」の藤田位(たかし)院長だ。早速「地  
域医療検討会」を立ち上げた三人  
は、自分たちの診療が終わると、  
「夜回り隊」と称して、夜七時半頃  
から地域の家庭をくまなく回った。  
そして、患者さんや家族が無理難題  
を病院の医師に押し付けると医師が  
逃げ出し、最後は病院が消えてしま  
うことを懸念(けんねん)と説いたのである。  
富原さんは「千葉県の銚子市立病  
院の例で、公立病院が潰れていく姿  
を目の当たりにしていました。西脇  
も危機的だったんです」と語る。検

討会は医師会が中心になって医師の  
現状、とりわけ勤務医の過酷(かこ)な労働  
を訴え頻繁(ひんぱん)に勉強会を開いた。

「反発されるかと思いましたが、心  
配に及びませんでした。私たちも頭  
ごなしに言わないよう努めました  
が、三人とも西脇市の出身だったこ  
とも大きかったです。共感をもって  
もらえました」

医師会という圧力団体や政治団  
体のようにも受け取られがちだが、  
ここではそんなことはなかった。富  
原さんは語る。「西脇の特徴は、ま  
ず地域医療検討会を医師会が立ちあ  
げて、医師会、守る会、商業連合会  
など、あらゆる団体が集合したこと  
です。そこに地元が集結し、医師会  
が主導していく形でした。検討会は  
扇(あき)の要(かなめ)なんです。医者を奪い合っ  
ても仕方がない。どうすれば医師が来  
てくれるかを考えました。まず、医  
師が働きやすい環境を作る。そんな

中、患者さんたちの意識の改革が大  
事だったんです」。

銚子市立病院、舞鶴市立病院、夕  
張市民病院などを例に、富原さんは  
医療現場の崩壊を住民に解説した。

「それぞれ理由は違います。兵庫県  
では、患者からの訴訟が起きて病院  
が医師を守らないために辞めていく  
こともありました。でも基本的に医  
師が逃げているのです。そして、コ  
ンビニ感覚で好き勝手な時間に病院



「守る会」の石井眞理子さん。小冊子を手に

に來られれば、当直空けの医師がそ  
の日の深夜に應對せざるをえない。  
これでは体がもちません。患者や家  
族が、むちゃな要求ばかりしては決  
して居ついてはくれないのです」

## 周辺開業医による 休日診療

こうした取り組みにより、救急車  
の出動回数と夜間受診が減った。

昨年七月、「地域医療を考えるフ  
ォーラム」を開催した。大盛況で関  
心の高さを示した。

市民には徐々に「病院は宝だ」と  
いう意識が根つき、ボランティア精  
神も芽生えた。住民がおにぎりを作  
って医局、オペ室、内科の詰め所な  
どに差し入れるようになったのだ。

「喜んでいただけますが、かえって迷  
惑なこともあるので『プロジェクト  
N』を立ち上げました。Nは西脇で  
す。NHKの『プロジェクトX』にち

なみました。そこでは院長、副院長、  
看護師長、事務長らが集まり、病院側  
としてしてほしいことなども提案、

検討するんです。西脇は釣り針や播  
州織でも知られています。竜馬の袴  
も播州織だったんですよ。聴診器な  
どのほか、播州織がいただけたら、

と言ってくださいる研修医さんいま  
した。嬉しいですね」と富原さん。

画期的なのが、日曜日にも開業医  
が交代で勤務してくれるシステムが  
できたことだ。勤務医の疲労もこれ  
で和らぐ。かかりつけ医と休日急患  
センターの運用で、日常的に頻度の  
高い病床に對応できるようになって  
た。せつかく立派な施設ができたの  
だから、可能な限り活用されるべき  
だが動くのは人間。疲弊しては意味  
がない。もちろん、富原さんも参加  
している。「あれ、先生なんでこん  
なところにいるんですか? と言わ  
れますよ」と笑う。

さらに病院の危機に敏感に反応したのが、西脇市商業連合会だった。

「ちょうど昨年、定額給付金が世を賑わしていました。どういう形にしていくなか考えるうち、何か病院を助けることができなかつたかと考えました」と語るのは、会長の新谷千久(ちひさひさ)さん。「にしわき市民生活応援券」という地域振興券を作った。券の売り上げの一割を病院に支援金として渡すことになったのだ。一〇〇〇円券なら一〇〇円使える。これを五五〇〇万円分作った。他地域のこの種の券は普通、商店街の活性化を目的として、その商店街でしか使えない金券であることが多い。しかし、新谷会長の発想は違った。

「私たちが作った振興券は、もつと柔軟に考えました。銭湯(せんとう)でも、西脇カントリークラブというゴルフ場でも使えます。あるいは、西脇市内の開業医の診察代金などにも使えるん

です」。要は西脇地域で消費するお金については、市民がすべて一割、得するような金券だった。

「なんと五〇〇〇万円の振興券が二時間で売れました。驚きましたよ。そしてこの売り上げの一割を基本的に研修医への支度金(しだうきん)のような形で渡してもらおうことにしたのです」

研修医としてやってきた医者(いしやく)の卵が、いつの日か勤務医として帰ってきてくれることを期待した。本人が帰らなくても、歓迎されたことを伝えてくれ、来てくれる医者が増えるかもしれない。新谷会長は言う。

「税金で特定の若者に、お金を差し上げるわけにはいかない。行政ではできないことを私たち(われわれ)民(たみ)の力でやるんですよ。今年も何とかやってみて。研修医が勤務医師として戻ってこなくても、それは仕方がない。でも西脇というところは市民が医師を温かく歓迎(かんたい)してくれる。あそこで働

いてみようかという雰囲気になつてくれたら、という切実な願いです。

病院は私たちの宝(たから)なのです。六〇年に一度建て替えられるような地域の宝物を、負(お)の財産にはしたくない。ここで若い夫婦が安心して子供を育てられなければ、人は減る。一方で地域振興も何もありませんから」

新谷会長の持つ「にしわき市民生活応援券」の片隅(かたぐも)には、真新しい西脇病院の写(しや)真(ま)が載(の)っていた。

## 全国のモデルケースに

富原(とみはら)さんは「立派な建物を造れば医者が来るというものではない。新病院は一五〇億円かかりました。青森(あおもり)県の十和田(とほだ)市民病院も同じくらいの規模で建て直したが、苦戦していると聞きます。医者が働きやすい場所にするのが第一。研修医をどう歓迎しようか、商業連合会の新谷会長

たちとプランを立てています。医者  
の個性にも合わせたいし」と語る。

地域の努力が実り、昨年春から佐  
伯啓介さんという若い医師が東京か  
ら赴任することになった。ついに小  
児科の入院診療が再開した。

「守る会」の石井さんは「おととし  
暮れに知り、本当に嬉しかった。村井  
代表たちと『やったあ』と喜びまし  
た。来てくださったからこそ次の活  
動をして、ずっと居てもらえるよう  
な環境を作りたい。まずコンビニ受  
診をやめて適正受診を広めたい」と  
語る。この春にも、嬉しいことに研  
修していた医師が赴任してくれた。

「助けられる側」の大洞慶郎院長  
は、西脇病院で二五年以上働いてき  
た。「医師は遠くからの単身赴任な  
ど大変です。皆さんで病院を守って  
くれて、我々も意欲が湧きます」と感  
謝しきりだ。医師数は四〇人に回復  
したが、まだ立派な施設の一部は

「宝の持ち腐れ」。最新鋭のNICU

(新生児特定集中治療室)も医師不足  
で働いていない。大洞院長は「病院  
の収入は基本的に医師数に比例しま  
す。医師がほとんど減り赤字が続き  
潰れていく、地方の公立病院の典型  
的なパターン。当直回数も激増して  
医師は疲弊していましたが、開業医  
さんに助けていただき少し楽になり  
ました。守る会や医師会、さらに行  
政も絶対に潰さないと頑張っていま  
す。看護師さんにしても、まだまだ  
事務の仕事をやらざるを得ないが、  
もつと専門に特化し、仕事に専念で  
きるようにしたい」と話す。

駐車場から、若い女性が花束を抱  
えて病院に入ろうとした。見舞い客  
かと思ったら、脳神経外科の二十代  
の看護師だった。花束は異動で離れ  
る看護師長へ贈るためだった。

「看護カルテも電子カルテになり、  
覚えるのも大変でした。インフルエ

ンザでは保護者の方も私たちも神経  
質になりましたが、守る会の方々と  
親子交流会を持つたりして理解を深  
め合えました。まだ医師も看護師も  
足りなくて大変ですけど、いい雰囲気  
なので頑張りたいです」と話す表  
情が、生き生きとしていた。

「守る会」の石井さんは、「私の子  
供は大きくなって丈夫になってきた  
ので、せっかく素晴らしい病院に入  
院もできるようになったのに、ちょ  
っと残念です」と笑う。

医師会、守る会、商業連合会など  
が中心に、「おらが病院」を守る取  
り組みの基本は、「病院は宝だ」の  
熱い思いである。

西脇市民は、「コンビニ受診」や  
「モンスタ―患者」などを自ら改め  
て医療関係者を敬い応援し、病院を  
もり立てている。硬直していた公立  
病院運営に風穴が開いた、全国のモ  
デルケースにもなるだろう。